

## 「ゆとり」のすすめ

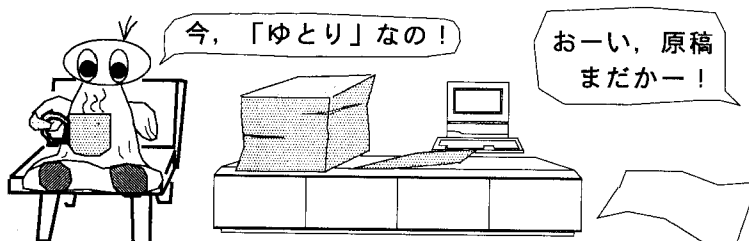
荒木 誠

1995年1月17日未明、直下型巨大地震が兵庫県南部を襲った。死者6,000人を超える大惨事であった。京都に勤務する筆者は、何回か現地を調査した。とくに、被災後1ヶ月足らずのころ市街地を歩いたときの惨状は、とても正視できるものではなかった。一面焼け野原となってしまった地域では、公園、学校など広場、緑地が延焼を食い止めていた。また、仮設の共同風呂やテントも緑地や広場に設置された。改めて、樹林地や緑地の大切さを知らされた。都市化していく中で地価は上昇し、土地という資源を如何に有効に、また経済的に有利に使っていくかということばかりが先行して、公園や緑地、まして単なる広場は、経済性の低いものとして蔑ろにされてきた。しかし、ひとたび、災害に遭えば、経済性追求の中で切り捨てられたものが、如何に重要であったか、思い知らされる。これは、日本中の都市共通の問題である。

しばらく前、ある自動車メーカーでは、グループ会社の部品製造工場が火災で部品製造ができなくなってしまったため、生産ライン全体がストップしてしまうとい

う事態が生じた。製造会社では、部品や材料を大量にストックすることは、経済的に不利である。必要なとき、必要なだけの確に供給できるシステムが良いわけである。余裕のあるストックというものは、ここでは無駄なこと、効率の悪いことと見なされるわけである。しかし、ひとたび不慮の事故が起これば事態は急変。余裕がないため、全生産が停止してしまう。今回のように、消費税値上げ前の販売増を見込んでの増産体制を組んでいる最中の事故は、かなりの損失となる。価格競争に打ち勝つために、ぎりぎりの努力をしてきた結果が裏目に出てしまったのである。

それらのことから、我々が知るのには、「ゆとり・余裕」の大切さではないだろうか。これは、機械などの設計の際に、最大荷重の何倍かの加重が加わっても安全に使用できるよう考慮される「安全率」にも通じる。物事を短期的な経済性だけで評価すれば、むしろ「無駄」かも知れない。しかし、一見、無駄のように見えるものが、たいへん重要であり、それが「ゆとり」なのである。



今、国家公務員研究職に任期付採用制度が導入されようとしている。就職口のない若手研究者への救いのようにも見えるが、終身雇用への道も、再任の道もないまま、優秀な若者が期限内に成果をあげることを義務づけられる。まさに、「ゆとり」とは、ほど遠い。しかも、現在の定員の枠内で採用するという。定員削減を優秀な研究者の使い捨てでカバーしようとしているようなものである。また、研究者の業績を簡単に数値化できるもので評価し、それを処遇に結びつけようという動きもある。

研究の新しい展開には、画期的な着想、斬新な発想、新鮮な想像力が何よりも必要である。そして、それらは精神的にも物質的にも「ゆとり」あるところで生み出される。常に機械的な業務に追われて、それに振り回され

ていたり、明日の糧を得ることに躍起になっているのは、とても豊かで創造的な研究はできない。より良い研究成果を生むには、常に、時間と資金に「ゆとり」をもった研究環境というものが必要になる。近年、資金の方は大分豊かになってきているが、やれ研究業績評価だ、やれ任期付任用だと尻をたたけば、良い研究成果が生み出されると、まだ誤解されているようにも思える。日本が、本当に科学技術立国を目指すなら、札束を見せながら鞭を打つより、心と物に「ゆとり」のある研究環境が何より重要である。研究者は基本的に研究が好きなのであり、ゆとりが生まれれば、ますます、研究にのめり込むはずである。そして、そのことが、創造性豊かな研究を生み出すのである。